

# 豪州ぶどうの生産と対日貿易

前 研究員 原 理紗

## 1 豪州産ぶどうの輸入が急増

豪州産ぶどうの輸入は、豪州に生息するチチュウカイミバエ等の防疫上の理由から禁止されてきたが、2014年2月以降、3品種(写真1)に限定して解禁された。14年の輸入量は251トンであったが、16年は9千トンに急増。18年には11千トンとなり、同じ南半球に位置するチリ(9千トン)を抜いて、アメリカ(16千トン)に次ぐ第2位の輸入相手国となっている。

## 2 世界第10位のぶどう輸出国

17年の豪州のぶどう生産全体(1,824千トン)のうち、生食向けは179千トンで1割に満たないが、その6割にあたる107千トンが輸出されており、世界第10位の生食ぶどうの輸出国となっている(第1表)。

輸出量はこの5年間で年々増加しており、19年は過去最高の137千トンに達すると予測されている(第1図)。輸出先は地理的に近いアジアが中心で、中国(輸出量の39%)、インドネシア(15%)、日本(8%)、香港(7%)、ベトナム(5%)、タイ(5%)の上位6つの国と地域で

8割を占める(18年)。

輸出量の9割強は南部のビクトリア州で生産されており、特にサンレイシア地域が多い。当地域でのぶどう生産は、1940年代、イタリアから移住した生産者によって開始された。現在も、その第2、第3代の子孫が引き継いだ1千戸の家族経営体を中心に生産されている。

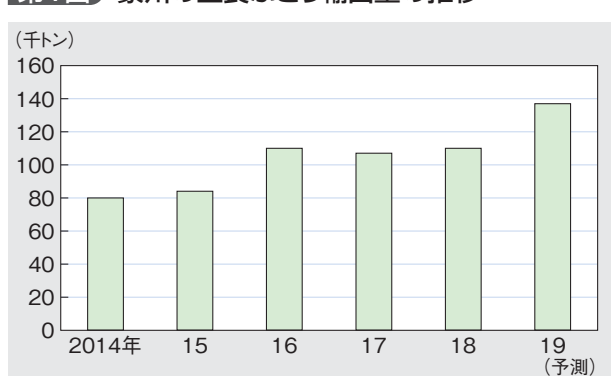
85年には、生産者、加工会社、販売会社で構成されるAustralian Table Grape Association(以下「ATGA」)が設立。生食ぶどうの生産技術や新品種の検討、政府との交渉を通じて、生産と輸出の拡大を図ってきた。

第1表 豪州の生食ぶどうの需給構造(2017)

(単位 千トン)	
生産量	179
輸入量	15
供給量全体	194
国内消費量	87
輸出量	107
消費量全体	194
(参考) ぶどう全体の生産量 (生食以外のワインぶどう、干しぶどうも含む)	1,824

資料 USDA(2018)、FAOSTAT

第1図 豪州の生食ぶどう輸出量の推移



資料 USDA(2018)



クリムゾン・シードレス

トンプソン・シードレス

レッドグローブ

写真1 日本向けに輸出されている豪州産ぶどう品種  
(出典：ATGA Webページ)

**第2表 主な品種の糖度基準と生産量**

(単位 %、千トン)

生鮮ぶどうの品種	果皮の色	糖度の最低基準	生産量	
			2018年 (実績)	2019年 (予測)
クリムゾン・シードレス	赤	18.0	70	75
トンプソン・シードレス	緑	17.5	48	52
メニンジー・シードレス	緑	15.0	30	32
レッドグローブ	赤	15.0	30	30
フレーム・シードレス	赤	16.0	5	5
ラリー・シードレス	赤	16.0	5	5
アイボリー・シードレス	緑	16.0	0	2
アリソン・シードレス	赤	18.0	0	2
スイート・グローブ	緑	18.0	0	2
プリンスティン	緑	16.0	1	2
メロディ・シードレス	黒	18.5	0	2

出典 ATGA(2019)および Department of primary Industries and Regional Development, Government of Western Australia (2018)より作成

(注) 糖度はBrix糖度。最低基準は2019年1月～8月収穫のぶどうに適用されるもの。

### 3 高品質生産のための検査と品種

豪州の生食ぶどうは、90年代後半に生産が急速に拡大した。当時は、酸っぱいぶどうや、味がしないぶどうが混入することがあったという。その反省から、ATGAが西オーストラリア州政府に依頼して、2001年に熟度の最低基準を導入した。各農家で収穫前に糖度と酸度の検査を行うことを義務づけて、基準を満たしたもののみを流通させることで、品質確保に取り組んでいる。糖度の最低基準をみると、日本と同程度<sup>(注)</sup>の水準であり、例えば、トンプソン・シードレスは17.5%以上、クリムゾン・シードレスは18.0%以上と定められている。

さらに、消費者のニーズに合う、皮ごと食べられる種がない甘いぶどうの生産量と品種数を拡充することで、需要拡大を図っている。従来からの人気品種の植え付けを増やしてい

(注)岡山県のシャインマスカットの糖度の最低基準は、18.0%以上。

るほか、19年にはメロディ・シードレスをはじめ多くの新品種が収穫可能となる(第2表)。

対日輸出は3品種に制限されているが、17年、豪州は制限撤廃を日本に要請し、現在協議が進められている。ATGAは、より多くの新品種を提案できるようになれば、対日輸出量は倍増すると予測している。

### 4 関税撤廃により対日輸出に追い風

ぶどうの対日輸出の関税は、14年時点で11月～2月は8%、3月～10月は17%あった。15年の日豪EPA発効以降、11月～2月の関税は徐々に下がり、18年4月には2.9%となった。さらに18年12月、TPP11が発効したことで、関税は撤廃された。したがって、今後、豪州産の価格競争力は一層強まるといえる。

この機会にATGAは、SNS等を活用したデジタルマーケティングや店頭キャンペーンを強化しており、日本の消費者に向けて高品質な豪州産ぶどうをPRすることで、輸出拡大を目指している。

このように、日本の豪州産ぶどうの輸入は今後も伸びることが予測される。出回り時期が重なる国産の柑橘類等は、その動向に注意する必要があるだろう。

#### <参考文献>

- ・ Australian Table Grape Association (2019)「国際貿易促進セミナー」2019年2月開催
- ・ Department of primary Industries and Regional Development, Government of Western Australia (2018) "Minimum standards of maturity for table grapes in Western Australia"
- ・ USDA (2018) "Australia Fresh Deciduous Fruit - Table Grapes"
- ・ USDA (2018) "Fresh Deciduous Fruit : World Markets and Trade (Apples, Grapes, & Pears)"
- ・ 東京税関 (2016)「生鮮ぶどうの輸入」

(はら りさ)